54年 7月
オ34号
発行者
根岸岳莘
編集
中村愛風
秋元梁風

吟道月報

(社団法人) 日本詩吟学院岳風会 認可
神奈川 碩心会 発行

会員数(54・7月現在)

逗子地区 123名
葉山地区 118名
大船地区 59名
合計 380名

想い出の詩

大船A 岩崎利風

子供の頃弟と喧嘩して物置に放り込まれた事があった。物置と言っても今の様な組立式の物置ではなく丈夫な床を張った一世帯住める様ながっちりした建物で米俵やお祝の塗椀其の他色々入れてあった。裏側に金網の張った小さな窓が一つだけ開いて居たが中は薄暗く唯怖くて入口の鍵のかかった戸を両手で叩き乍ら大き声で泣きわめいた。泣き疲れてふと見ると隅の方に赤い表紙の本が一冊あった。開いて見たが漢字ばかりで難しくてとても読めなかったが頼山陽の「本能寺講は幾天ぞ」すっかり気にいって所々覚えてしまった。昔は剣舞が盛りで川中島や城山は子供でも良く知って居た松竹スタジオが近いせいもあって俳優さんが素晴しい剣舞を見せて呉れたので今でも白虎隊の凛々しい姿が焼きついて離れない晩学ではあるが詩吟を習う様になって本能寺を勉強した時にはあの頃の事が想い出されてとても懐しい思いがした。

詩吟を初めてから十年故本も大分古くなったが昔のままの気持で長々長く勉強して行き度いと念じて居る今日此の頃です。

しぶきては
城址めぐる
夏の潮
(新井城址にて) 桂風

◎碩心会温習会終る

去る六月十日　逗子図書館ホールに於て行われ予定の企画通り終了しました。会中程で春季昇伝合格者に許証の受与が行われ、合吟コンクールには各組執吟、次の組々が入賞しました。

優勝　逗子B支部　　二位　逗子A支部
三位　下山口支部　　四位　滝ノ坂支部
五位　堀内支部D班

◎県本部二十五周年大会盛会裡に終る！

藤沢市民会館に於て定刻に開催され会場が満杯になる程の盛会でした

碩心会から男子五十名の会吟（碩心会の詩）女子五十名の合吟（爾霊）と構成吟神奈川詩情に左記の方が出吟（演）されました。

詩舞、白鳥は…舞、前野君江、磯村朋山
西村昌風、綾部秋風
千葉香風
吟、千葉剣風
〃　通り矢と…舞、鈴木涛山、中村愛風
（念と言う）加藤秀岳（漫吟）梶岸岳萍（神州）松井岳洋。

人物紹介……竹村梅風さん

碩心会かげの功労者として色々お世話をして下さっている竹村梅風さんを紹介してみたいと思います。

所属は逗子A組、碩心会女性会員の中の最古参、千葉香風さんの実母でいられるので千葉剣風さんの義母になられる。

お家がなぎさ通りのド真中（竹村クリーニング店）で、地の利のよい事から碩心会の連絡所として、色々の連絡をはじめ、故本、吟道誌の配布等、又ついこの間まではなぎさ会館がすぐ近いという事で、おけいこ、集会等のある度に何やかやと大変お世話になりました。

そんな事で今まで竹村さんを訪れた方は数限りない事と思いますが、いつも変らぬあの笑顔、温和な人となりが満面に溢れています母娘一緒の趣味を持っていらっしゃる千葉さん親子は羨ましき限り……毎年、年の始めに墨書きの年賀状をいただけるのが非常に楽しみ……いつまで〳〵お元気で……　（愛風）

碩心会に於ては松井先生の御指導により、最近〝春江花月の夜〟を習得された方が多いと思います。初めから終りまで春の揚子江を舞台に流麗なリズムでうたいあげたこの詩に心の底からひきこまれるようです。たまたま根岸先生が解説の部分をお持ちでしたので、お借りして次に転記一せていただきます。

春江花月の夜

張若虚

春の夜の長江、みなぎる潮水は海に連なって平らかに広がる、海上にさしのぼる明月は満ちてくる潮とともに湧きあがるかのよう。

月光はゆらめき、きらめいて波のまにまに果てもなく広がる。この春江のいたるところ月光は隈なくあふれているのだ。

川の流れはゆるやかにうねり、美しい春の野をめぐって進む。月光は花咲く木々に照り映えてさながら白い霰が散るかのよう。

空中を流れとぶ白い霜は月光とともあって それとも気づかせない、汀にひろがる白い砂は月光とともに輝いて見分けもつかない。

川も空も透明な光につつまれ、わずかな塵のかげもない。空中にかかる一輪の月はいよいよ白く、いよいよ冴えわたる。

思えばこの江の畔ではじめて月を眺めたのはどんな人であったのか。川辺にあふれる月光がはじめてその人を照らしたのはいつのことであったのか。

世々、代々、人は生まれかつ死んで、窮りやむことなく移ろうの川辺を照らす明月は年毎に同じ姿を繰り返すのだ。

いったいこの月は誰を待ちうけているのであろう。ただ人の暇にうつるものは、無限不尽の長江が流水を送りつづける姿のみ

白い雲がひとひら遠くはるかに消えてゆく。青いかえでの茂る水辺、旅人はひとりたえがたい愁いに沈んでいる。

今宵小舟に身をよせて、あてもなく異郷をさすらう人、それはいったい誰なのか。はるかな夫を思いつつ明日の楼中にすわる人、そ

れはいずこの女性なのか。

ああその楼上に月光はさりがたくきらめくのだ。夫と離れ住む妻のその可憐な化粧台を月光はやるせなく照らすだろう。

玉のとびら、美しい簾、しかし光を捲きこめようとしても空しいこと、冬の衣をつつ砧のうえ、払っても払っても光は降りそゝぐ。

いまこの時、こうして月を望みつゝ、遠い夫を慕ってもその便りを聞くすべはない。せめてはこの月光に追いすがり、ともに遠く流れて恋しいあなたを照らせたなら。

くやしくも鴻雁の群は長く飛び、月光は空しくさえぎられる。魚龍は水底にざわめいて月光は水絞をなして砕け散る。

昨夜しずかな水辺に小舟をよせ、私は夢に落花を見た。はらはらと散ってゆく花をみた。ああ春はすでに半ば、しかしまだ家には帰れない。江水は春を押し流し、春はこのまま尽きようとしている。深い淵に映る落月ももう西の夜空に傾いたではないか。西に傾くその月は深く静かに川霧の中に消えてゆく。北は碣石から南は瀟湘まで、人の旅路は限りなく続く。こよい月光にぬれながらあわれ幾人の旅人が故郷への路を急ぐのであろう。いま沈みゆく月かげは胸の思いを揺りうごかし、川辺の木々の間に満ちわたる。

人人　△二Δ▽

（沼間支部）渡辺元治　逗子市沼間一ニ二一（電）468(73)八〇五七

〃　〃　松原幸枝　〃　〃　一一七一三

（逗子△支部）柴田昭司　〃　〃　新宿三ニ三三ニューライフニ三七

＜退　△五▽

104 宗形節山（建）　118 宗形幸山（建）　168 坂井田洲山（銀）

207 鈴木雄山（下山）　245 草柳龍泉（沼）　250 新倉桂泉（船B）

286 杉田涼泉（沼）　勝　壱子（船A）今井健介（船B）

○〜○〜○〜○〜○〜○〜○〜○〜○〜○

ためしてみませんか

大根を千六本に切り蜂蜜つけにしてその汁をのむと、のどの病気によいとか。今年は悪性の風邪がはやり、私達のどを使う者にはちょっとためしたくなるものです。